

2023. 朗読会 ゲストのご紹介

ゲストの皆さん、本日はご参加をいただき、誠にありがとうございます。

朗読家 久保島 菜穂子さん

作曲家・朗読演出家の服部和彦氏に朗読を師事。『朗読 季の会』所属。
年に2~3度舞台に立つ。朗読を勉強し始めた動機は「認知症予防のため」
(本人談)。自称、パートタイム労働者。茶道など趣味多彩。
新潟県出身、あきる野市在住。
本日は戸部内 杏作『尋ね人の時間』を朗読していただきます。

男声合唱団 『カワセミ』の皆さん (敬省略)

指揮者	後藤 勝巳			
ピアニスト	二瓶 充			
トップテノール	星野 昌三	小河原 正三	石川 禎男	
セカンドテナー	佐藤 正朗	佐藤 篤彦	二瓶 充	
バリトン	平島 保利	市川 俊朗	井深 亮	
ベース	田中 捷義	池上 隆一	新倉 幸四郎	

以上13名の皆さん

曲目

第1ステージ	「いざわが歌」「見上げてごらん夜の星を」
第2ステージ	「故郷」「ふじの山」「荒城の月」
第3ステージ	「ステンチェン」(ドイツ語)「野ばら」(ドイツ語)

第 3 回

エッセイ・戦争体験記

朗 読 会 プログラム



2023.10.24 13:00 より

多摩平の森ふれあい館 306 集会所

日野市平和活動推進補助対象事業

主催 多摩文學の会

2023年 第3回 **多摩文学の会・朗読会 プログラム**

ご挨拶 多摩文学の会 海野 靖雄

第1部

合唱 男声合唱団『カワセミ』の皆さん

曲目 「いざわが歌」 「見上げてごらん夜の星を」

《 エッセイ朗読『多摩文学の会』の皆さん 》

中野 和子 ありがとう『岩波ホール』 6頁

杉本とも子 父を乗せて 8頁

新井 美沙子 シェスタの午後 10頁

なかい ゆりこ 夏は朝顔 14頁

音無さら 毎日がリハビリ 17頁

重森 勝美 ダリアの花 19頁

にしの まり* 神楽坂の富士山 20頁

坂井 繁子 鯉の煮付け 22頁

浅川 清流 おかしな遺品 26頁

第2部

合唱 曲目 「故郷」 「ふじの山」 「荒城の月」

《 戦争体験記 朗読 多摩文学の会の皆さん 》

戸部内^{とべない}杏^{あん} 尋ね人の時間です 28頁 代読・久保島 菜穂子

松下かほる 白いカーネーション 31頁

由佐 豊子 ドウブロヴニクの少女 34頁

角川 洋子 ひもじい 37頁

川嶋 博 戦時下の日野を語る 40頁 代読・海野 靖雄

合唱 曲目 「ステンチェン」(ドイツ語)
「野ばら」(ドイツ語)



ありがとう『岩波ホール』

中野 和子

壁を覆ったチラシが輝いている。このホールで過去に上映された映画のチラシたちだ。

2022（令和4）年6月22日。私は二人の友人と一緒に東京、神田神保町にある岩波ホールに来ていた。上映中の映画『歩いてみた世界ブルース・チャトウィンの足跡』を観るためだ。実はこの映画はこのホールで上映される最後の作品だった。岩波ホールはコロナ感染の影響で経営が悪化したこともあり、7月29日をもって閉館することが決まっていた。

岩波ホールは1968（昭和43）年、当時岩波書店社長であった故岩波雄二郎氏によって開設された。そこで初代総支配人を務めた故高野悦子さんは「岩波ホールを拠点に、世界の埋もれた名画を発掘・上映する運動」、エキブ・ド・シネマ運動を展開した。

映画好きだった職場の友人に誘われて、私が初めてこのホールを訪れたのは1999（平成11）年7月のことだった。その時観た『枕の上の葉』は3人のストリート・チルドレンと彼らが慕う露天商の女性の姿を描いたインドネシアの映画だった。残飯をあさり、かつぱらいをしながら暮らす子供たち。しかし3人は次々と命を落としていく。一人は故郷に帰ろうと汽車の屋根に上がりトンネルに頭をぶつけ、他の二人はマフィアの犠牲となって。死体はゴミ捨て場に捨てられ、葬ってくれる墓地さえない。衝撃的だった。

その後、私は職場の友人5～6人と、このホールに足を運ぶようになった。仕事が終わってから皆で連れだってホールに出向くのが常だった。映画が終わると隣のビルにあるブラジル料理の店で、お酒を飲みながら感想などを語り合った。

9年前に退職してからは午前中の一番早い時間帯にホールを訪れるようになった。気が付いてみれば一緒に映画を鑑賞するメンバーは、私を含めて3人に

なっていた。そしてここ数年はコロナ感染の影響でホールから足が遠のいていた。やっとコロナ感染が落ち着きを見せ、また足を運ぶようになった矢先、飛び込んできたのが岩波ホール閉館のニュースだった。

最後の映画を見終わった後、私たちは再び壁に張られたチラシの前に立った。そして「あの映画も観たね」「観た、観た。いい映画だったね」などと言い合いながら、もう訪れることもないであろうホールとの別れを惜しんだ。最後に私はスマートフォンでチラシを撮影した。

そして私は、こうつぶやいていた。

『あなたは幾度となくまだ見ぬ世界への扉を開け、私を豊かにしてくれました。・・・ありがとう、岩波ホール』



父を乗せて

杉本とも子

そのとき、父は100歳だった。

父の見舞いのため帰省し、父を乗せて故郷を走るドライブのことである。

私の故郷は宮城県の南端、伊具(いぐ)郡丸森町にある。二か月に一度、東京都日野市の家から車で約360キロの距離を6時間以上をかけて高速道を走り、丸森町へと向かう。私は車の運転が根っから好きなので、それがとても楽しい。

車窓からは四季の景色が楽しめたし、車中では恥ずかしげもなく大声で歌も唄える。途中のサービスエリアで茨城、栃木、福島県の生産物を見て回り、あれこれ買い物をするのも楽しい。

一人で運転し続けるのは疲れるが、何度も外に出て私の到着を待ちわびる父の姿を思い浮かべると、疲れは帰京するまで身体の奥にしまい込む。

父は100歳の誕生日を迎えても元気に野菜を作り、ご近所に配っては喜ばれていた。その日も、いつものように自転車に乗ってご近所へ野菜配りをしていた。ところが帰る途中、大きな交通事故に巻き込まれてしまった。手術と三カ月の入院、さらにつらいリハビリを経て、杖を使いながらも歩くことができるようになった。しかし大好きだった畑仕事はもう無理だった。

父と一緒に住む兄の家族は忙しく、一人こもりがちな父の体調が心配だった。定年退職して時間的に余裕ができ、定期的に帰郷ができるようになった私はあることを思い立った。父をマイカーに乗せ、周辺の名所や温泉へ一泊のミニ旅行に出かける父とのドライブである。

父も、兄の家族も、私の家族も賛成してくれた。

車が走り出すと父は喋り始める。ご近所のこと。昔の思い出話。自慢話。すでに他界した母との思い出などを機関銃のごとく話し出す。もう何度も繰り返され聞かされている話なのだが、私は初めて聞くかのように「へえー、そうなんだ」と相槌を打つ。

父は昔から大声だし、会話も方言なので、電車やバスの中では少し恥ずかしい。しかしマイカーであれば、大声でも、訛りのある地方言葉でも、愚痴でも何でも、思う存分話してもらえることができる。だからこのドライブは、父にも私

にも楽しいドライブだった。

ドライブでは真っ先に、あの東日本大震災で父が気になっている被災地へと向かう。震災にみまわれた隣町、宮城県亘理(わたり)郡山元町は母の故郷だ。父にもたくさんの思い出があるはずだ。山元町はいま大掛かりな復興工事が進められている。その様子が気になるのだろう。

浜辺の瓦礫の山間を、大型のダンプカーが絶え間なく行き来している。ダンプカーは山で囲まれている私の故郷の丸森町から、隣町、山元町の被災地の浜辺や宅地の「かさ上げ」のために土を運んでいる。

父は「邪魔になるから引き返そう」と言う。私は迷惑にならないよう気をつけて走行する。しかし道路が悪くて、ノロノロの徐行運転を強られる。確かにダンプカーの邪魔になっていたはずだ。それなのに、私の運転に怒って、クラクションを鳴らす人は誰もいない。

ある時、道に迷った私は左折のウィンカーを出したまま、左折をしないで止まっていた。すると一台のダンプカーが止まった。『これは怒鳴られるぞ』、私は覚悟をした。ダンプカーを停めて降りてきた運転手は、なんと乗用車が通れる道を親切に教えてくれたではないか。ダンプカーの運転手は粗野で横暴だ、と思っていた私は、自分の偏見を恥じた。

父は前を走るダンプカーを見ながら、「この車は札幌から津軽海峡を渡って来てくれている」と驚きの表情で言った。確かに、行きかうダンプカーのナンバープレートは大阪だったり、和歌山だったり、福井だったり、色々な地方名が記載されている。遠くから復興支援に来てくれているのだ。「みんなが全国から来てくれて復興が進んでいる。有難いことだ」。父は感慨深げだ。

やがて私の車は、今夜宿泊する温泉地に向かって走り出す。

私との6年間、31回のドライブを終えて、父は106歳で天寿を全うした。

もう定期的な帰郷は必要なくなった。「父ロス」の期間もあって、ハンドルを握ることが少なくなったが、車の運転は変わらず好きだ。

私の車は高齢者向けの制御装置など、安全装備を完備している。この愛車の助手席に父との思い出を乗せて、いつまでも、どこかを走っていたいと思う。

しばらくは「免許返納」をお断りすることにして。

シエスタの午後

新井 美沙子

「あっちっちー！」

列車を降りたとたん思わず声が出た。

気温は42度。スペインのアンダルシア地方の夏は、やっぱり灼熱のフライパンの世界だった。

午後3時、ギラギラする太陽は容赦なく降り注ぎ、顔がチリチリし始めた。止まっているはずのタクシーは一台も見当たらない。

15年前の夏、空港で合流した留学中の娘を案内役に、異国の旅の一步を踏み出した時のことである。

その1年前、銀座の陶芸教室で働いていた娘が、「もう少しデザインの勉強がしたい」と言ってスペイン留学を宣言してきた。密かに語学教室にも通っていたらしい。3年間ということで、私は心配しつつも喜んで送り出した。

そして今回、用心棒役の次男も仲間に、娘と3人でスペインのアンダルシア地方の旅となった。

「ホテルまで歩いて行くしかないねえ」。皆で重いスーツケースをゴロゴロ引っぱり、熱気にクラクラしながら緩やかにカーブした坂を登って行った。私達3人の荷物を転がす音だけがあたりに大きく響いている。

8月のどこまでも高く青い空。家々の白い壁。その下を黒猫が一匹、ゆっくりと坂道を横切っていく。

カフェもバルもブティックもシャッターを下ろし、やけに静かだ。家の前で賑やかにお喋りするおばさん達も、路地を行きかう人も誰もいない。

そう、みんな昼寝の真最中。スペインはただいま大事な『シエスタの時間』なのだ。

この国では大抵の人は午後2時頃までに仕事を終え、一日の中で一番のご馳走を家族や友人と時間をかけて楽しむ。それから6時近くまでゆっくり休む。

昼寝をしたり本を読んだり庭のプールで泳いだり。その後シャワーを浴びて、それからまた一仕事だ。カフェもバルもそろそろ夜の準備だ。夕食は遅い。特に週末になると夜遅くまで若いも若きも外に繰り出す。幼い子供達までも親と一緒に広場で遊ぶ。

どこからかフラメンコの曲が聞こえてくる。広場の噴水が大きく飛沫をあげている。昼の暑さから解放されて、涼しい夏の夜はいつまでも明るくて賑やかだ。こんな光景が繰り広げられるのは、夏の日没が夜の10時という国だからなのだが。

日本では信じられない話だけれど、ここスペインでは何事も人生を楽しむためにある。もちろん仕事も、そして大事なお昼寝も。

これが彼らの生きる基本らしい。

20分かけてようやくホテルに着いた私達も、シャワーを浴びてさっそくシエスタを決め込んだ。

3階の部屋は窓が開けっぱなしで、エアコンは付いているのにスイッチは入っていなかった。

外はあんなに暑かったのに、一步室内に入るととてもひんやりしている。この国の建物には大理石が多く使われているので床や壁は夏でも冷たい。

ベッドに寝ころぶ。窓辺のレースのカーテンが涼しい風を運んでくる。疲れた体に心地よい。風が治まると乾いた元の空気にゆっくりと戻る。その交互に感じる温度差が、ぼんやりとしたリズムになって重なっていく。蝉の声を聴きながら母のそばでウトウトした子供の頃が浮かんで来て、はるか遠い異国にいることを忘れてしまいそうだ。

目を閉じると、優しい風の中で私はいつしかまどろんでいた。

翌日から、私達は街歩きや郊外散歩をしながらの旅を楽しんだ。

イスラム教とキリスト教が見事に融合調和するモスクの建物。コルドバの小さな白いホテルや小道は花がいっぱいで、まるで童話の世界だ。

夕焼けに染まる丘の上のアルハンブラ宮殿。坂の途中、立派なお屋敷の白い塀に描かれた一匹の黒猫の絵。(翌年、またこの道を通ったら、なんと黒猫がもう一匹追加されていた!)。この国には黒猫がよく似合う。

水パイプを吸っている老人達がたむろしている喫茶店。薄暗く怪しげでちょっと怖かったけれど、そこで飲んだ「チャイ」は熱く甘く、疲れた体に優しく染み渡った。「チャイ」とはスパイスの効いたとても甘い、「イスラム式紅茶」

のことだ。

夜の路地裏で『ロマ族』の親子が売る「ビーズ刺繍」の袋に目が止まった。痩せた母親にまとわりついている少女の黒目がじっと私を見ている。つい手に取ってしまった袋だが、今でも大事にしている私のお気に入りだ。

ここグラナダはどこへ行っても狭い路地と坂道があり、それがこの街を魅力あるものにしてている。列車やバスから見える広大なひまわり畑。延々と続く赤土の丘陵や途切れることのないオリーブの林。つくづく国土の広さを思う。

念願のパラドールにも泊まった。パラドールは中世の古城や修道院を改装した国営のホテルで、スペイン全土に100ヶ所近くあるという。どれも丘の上に立っていて絶景が楽しめる。

旅を続けているうちに、私達はアンダルシアの40度を超える熱く乾いた空気にだんだん馴れていったようだ。ここでは暑くて汗は出るけれど、さらさらしていて不快な感じはしない。そしてもちろん、私達はこの国のシェスタの習慣にもすっかり馴染んでいた。

朝から出掛け、歩き疲れたらホテルに戻って、一寝入りしてシャワーを浴びる。夕方になればどこからか涼しい風が吹いてくる。そろそろ外へ出る時間だ。どの街にも広場があって、人々が集まって来る。日の落ちない夜をみんなで楽しむ。

そういえば、この国の人達にはちょっと目が合えば、「オラ！」と声を掛け合う習慣がある。

例えば、町の立ち飲み屋『バル』で酔ったお爺さんが、ウイंकしながら隣の私に。お店でお菓子を選んでいるマダムと目があったら、にっこりと。狭い路地で道を譲ってくれた少年と。

店に入る時、店員さんに言うのは「入りますよ〜！」の挨拶代わりだ。

「オラ！」は、先に言ったもの勝ちだ。その方が気持ちがよい。初めは、返事さえぎこちなかった私も、いつの間にか自分から声をかけるようになっていた。

「オラ！」「オラ〜！」。この一言で、お店の中や周りの雰囲気は私のものになる。一步前へ出るための大事なおまじないの言葉、これさえあれば旅はきっと上手くいく。

バレンシアの娘のアパートに戻ったのは一週間後のことだった。

『荒涼とした台地、広く乾いた土地。そこにはオリーブやオレンジの畑がどこまでも続き、ところどころにオアシスの様に街がポツンポツンとある。その中の一つの古い地方都市』。

これが予備知識のほとんどなかった私が描いていたバレンシアの街だ。そこはスペイン第三の都市だという。

そして、長旅のあと漸く私が目にしたバレンシアは、想像をはるかに超える大都会だった。

世界遺産級の古い建築が立ち並ぶ落ち着いた中心街。その一方、その周りには明るく近代的な芸術科学都市だ。緑の多い大きな公園があちこちにある。

スペインは子供にやさしい国だという。オレンジの実が生る街路樹。初夏に咲く見事なジャカランタの花。郊外には水田風景が広がり、パエリア発祥の地で知られるここは有数の米どころだ。地中海気候のため、温暖で生活しやすく物価も驚くほど安い。

娘のワンルームでの雑魚寝も、昔の子供部屋を思い出して親子で楽しんだ。

娘の通う芸術学院も見学した。親しくなった現地の日本人の方々やスペインの友人達にも会うことができた。

『生きることにあまり器用とは言えないのんびり屋の娘だ。それでも、何とか受け入れてもらえそうな優しい国の様な気がする』。『ここに及んで私が心配することって何があるのだろうか？』。

『大丈夫、この国で生活を始めた娘を心から応援しよう』。

そんなことを思いながら私はバレンシアで数日を過ごした。

娘の留学生活を見届けた私と息子は、2週間の旅を終えドイツ経由で帰路に就いた。

降り立った日本は、想像以上の蒸し暑さだった。何もしないのにじっとり汗ばんで来る。

これが日本の夏だ。『まだまだ当分こたえるなあ』。そう思いながら見上げた成田の青い空。そこには、早くも翳雲がきれいに広がっていた。空も高い。

もうすぐ9月、スペインではシェスタの夏がそろそろ終わる。



夏は朝顔

なかい ゆりこ

八月の朝のことである。

私は目を覚ますと、すぐにヴェランダの扉を開けた。

一、二、三、四、五。

今朝は青紫色の朝顔の花が、五コ咲いている。ラッパの形をした花びらの奥の方は白い色をしており、花びらの青紫色との組み合わせが実に爽やかだ。

清々しい早朝の空気の中で、朝顔の花が咲いている様子を眺めることは、何と気持ちのいいことだろう。

ちょうどその時どこからか、おしゃべり上手なガビ鳥のピッチピッチ ピーチュルピーチュルという鳴き声が聞こえてきた。鳥の鳴き声に後押しされて、『よし。今日も一日、良い日になるように頑張るぞ』というファイトが沸いてきた。

五月の連休が終わる頃になると、そろそろ土の準備のことが気になってくる。重い腰を上げてやっとプランターの中の土をいじくり回す。大昔から人類は土を耕して作物を育て命をつないできたのだ、という概念がふと頭をよぎる。

六月に入り、どんよりと曇った日や雨降りの日が続くようになった。どうやら梅雨に入ったらしい。種子まきにはよい季節だ。この時期、植物たちはぐんぐんと育っていく。

私は、昨年咲いた朝顔の種子をとっておいた。その中から大きくてしっかりした種子を二十粒ほど選んで一晩水につけておく。次の日、それをプランターに準備しておいた土の中に埋める。これで種子まきが完了する。

種子をまいた後は、無事に発芽してくれることをひたすら待ち望む。毎日プランターを覗いているうちに、やっと一つ出て来たのを見つけた時の喜びは格別なものだ。そして、次々に芽が出てくるのが楽しみだ。芽が出揃ったところで発育不良のものを間引いて適正な数に整える。

発芽した朝顔たちは競争でもしているかのように、双葉から本葉へとぐんぐん伸びていく。早いものはもうツルが出始める。こうなると悠長に構えているわけにはいかない。ツルがつかまる支柱を用意しなければならない。私は、毎年荷造り用の紐で格子状のネットをつくっている。

荷造り用の紐の片方の端を割り箸に結んで土の中に差し込み、もう一方の端を物干し竿に結ぶ。これを朝顔の数だけ作る。さらに、横にも紐を結んでいって格子状のネットにする。こうすることで、風にも強くなる。

支柱を用意してやると、朝顔たちは勢いを増して上へ上へと向かって伸びていく。そして、あっさりと物干竿を越えてしまう。その先は？ その先は手に負えないので、伸びるに任せておくしかない。

私はどうしてこんなに朝顔好きになったのだろう。

最初は、小学校二年生の時だった。学校で育てていた朝顔を夏休みで家に持ち帰った時に、父親が丸い支柱を丁寧に作ってくれた。この時の朝顔とのかかわりは、この部分だけしか覚えていない。

次は、大人になってから川崎市の小学校で働いていた時のことだ。小学校一年生の担任になると『あさがおをそだてる』ということ学習する。朝顔栽培に慣れていない私は、四苦八苦をしながら取り組んだことを覚えている。

その後は、朝顔のことは忘れて暮らしていた。夫が他界し、子育ても終わり、再び一人の生活になった時にふと思い出して、朝顔の栽培を始めるようになった。

何を隠そう。実は私は朝に弱いタイプの人間だった。ある時、そうだ、朝顔を植えれば花を見るために早起きをするのではないかと思い、実践してみた。

その結果、今では早起きをすることが出来るようになった。時には、朝顔よりも早起きをすることがある。

朝顔は、ただ夜が明けただけでは花は開かないことに気が付いた。太陽の光がある程度当たることが開花することの条件のようだ。

夕刻、我が物顔に輝いていた太陽がようやく西に傾く頃に、夕方の水やりをする。植物たちは昼の暑さで葉っぱをぐったりとさせている。水をたっぷり注いでやり、明日の朝また元気になって会えることを願う。その時、朝顔の葉陰にツンととがった蕾をふと見つけたりする。これは明朝、花を咲かせる蕾だ。この蕾が花を開いたところを見るために、明日も早起きをしよう。

朝顔は私に明日への希望を与えてくれる、特別な花なのだ。



毎日がリハビリ

おとなし
音無 さら

「後期高齢者は、日々リハビリを意識しなければいけないのよ。体を動かすことも頭脳を働かせることも全て。一日一日、楽しく満ち足りた生活を送るために大事なの。私達はおっくうがらず、面倒だなんて言わないで動くことを楽しみましょうよ。・・・だから、パーティーの水餃子は手作りね」

カヨ子さんの提案に、私は思わず「スーパーに美味しい水餃子が売っているけどなー」と愚痴っぽく言った。

「エッ！ 自分たちで作るの？ 想定外よね」。りょう子さんも戸惑っている。しかしカヨ子さんの言葉一つ一つには説得力があり、私達は納得して当日の段取りや役割分担などを決めた。

元職場が一緒に、年齢が近いカヨ子さんとりょう子さんと私の三人は、職場の先輩であるヒロさんが退職後に20年間務めた社会福祉法人の理事を辞めるにあたり、慰労会を開くことにした。その慰労会が『手作り水餃子パーティー』である。

ヒロさんは今年82歳になった。60歳で定年退職後、障害を持つ人のための福祉作業所でボランティアとして利用者の方々と関わってきた。

ヒロさんは他人を思いやる気持ちが熱く、手助けを必要とする人への確に手を差し伸べるなど、献身的な支援をする人だ。作業所のスタッフや利用者に信頼され、その母体である社会福祉法人の理事になった。その後理事長に押され、さらに法人が運営している作業所（現在は就労移行支援事業所）、地域生活支援センター、グループホーム、障害者ホームヘルプサービス事業、相談事業などに総合的にかかわる重責を担ってきた。

今日のパーティーの主演であるヒロさんはお客様ではなく、私たちと一緒にリハビリに参加するメンバーである。

「ヒロさん、長い間障害のある方たちに寄り添ってこられ、お疲れ様でした。今日は私達の感謝の気持ちをお伝えしたくてお呼びしました」。カヨ子さんが口

火を切った。

「きょうは水餃子パーティーです。お互いの健康維持を図って、水餃子を手作りすることにしました」

いつも元気なりょう子さんが、弾んだ声で言った。

「有難うございます。皆で餃子を手作りするのね。力を合わせて仕事をするって、昔に返ったみたい」

ヒロさんは楽しそうだ。

4人は餃子づくりに取り掛かった。それぞれが分担してニラ、長ネギをみじん切りにし、生姜とニンニクを摺り下ろす。これをひき肉と一緒に粘りが出るまでよくこねてタネを作る。タネを水餃子の皮に包み、沸騰した湯に一つずつ丁寧に入れる。茹で上がった水餃子は付け合わせに入れた野菜と一緒に、土佐のぼん酢しょうゆで頂いた。

とってもシンプルな水餃子だが、4人で鍋を囲み、ヒロさんの理事長としての苦労話や、利用者の方々の笑顔が仕事を続ける原動力だったという話に耳を傾けた。そしておしゃべりをして大きな声で笑い、「おいしい！ おいしい！」とたくさん食べた。

ヒロさんの今までの社会貢献に対する慰労会としてはささやかなパーティーだったが、この会は慰労だけにとどまらず、リハビリを含んだ広がりのある会になった。

パーティー会場であるわが家へ足を運び、手を動かして水餃子を作り、その美味しさに舌鼓をうち、おしゃべりをして大きな声で笑い、声帯と喉と腹筋を動かす。だから体や頭、心や五感などをより一層活性化させることができた。

ヒロさんへの感謝の気持ちも十分に伝え、一挙両得の素敵なパーティーだった。

うーん、でも私的にはちょっと食べすぎたかな？ おなかの皮までストレッチしなくてもよかったのだけれど・・・。



ダリアの花

重森 勝美

まるでボンボリのような。たっぷりとした量感のあるピンクのダリアは、我が家に咲き始めて三年目の夏を迎えていた。

ダリアは『灼熱の太陽の季節こそが私の出番なのよ』と言っているかのよう
に、見事な大輪の花を咲かせて見せている。

道行く人を愉しませて、誇らしげだ。

「ねえ、ダリア頂戴。職場に持っていくと、みんなが喜ぶから」
突然の声に振り向くと、ご近所の宮川さんが車から降りてきた。

「認知症の人でもね、きれいな花を見ると嬉しそうなのよ」

私は庭仕事の手を止めて、ダリアを摘んであげた。宮川さんは仕事先の老健
施設のテーブルに活けて、入所の方々を喜ばせたいようだ。

「今朝とれたのよ」と、野菜農家の原さんが真っ赤な大きいトマトと黄色の
中玉のトマトを持ってきた。「うわっ、おいしそう」と、私はトマトを受け取る。

原さんは、「きれいだよねー。ちょーだい」と、庭のダリアに見入っている。
原さんもダリアの花が大好きなのだ。

散歩仲間の丸岡さんが「新潟の義理の姉が送ってくれたの」、と笹餅を届けて
くれた。

「お供えてね」、私は丸岡さんにダリアの花を手渡す。

「きれいね。きっと喜ぶわ」

と少しだけ微笑んだ。丸岡さんは10日ほど前にご主人を見送ったばかりだ。
ダリアの花から、元気をもらってほしいと念願する。

私の長女は「ダリアの花が咲いたら、お花の大好きな近所の坂口さんに届け
たい」、と咲く前から待っている。坂口さんは80歳代のご夫婦である。

私の家庭菜園の師匠でもある水谷さんからいただいた一株のダリアは、3年
の間に我家の庭のあちこちに植えられて増え続けた。切り花として花瓶に活け、
愛でられ、喜ばれている。みんなが喜ぶダリアの花って、いいなあ。

ダリアは『幸せを運ぶ花』そのものだ。

神楽坂の富士山

にしの まり*

「何しろ取り巻き連中をぞろぞろ引き連れていきなりやって来てさ、やれお茶だのやれ団子だのと言って時間潰しをしてね、夜になったらそれ芝居見物だ、ほれ宴会だって出て行くんだから、それもみんな付け払いでさ」

「それじゃ小母さん困ったでしょう」

「そうよ、すぐに50円100円くらいになっちゃうの」

「それで、お金持ってないんでしょ」

「そうそう、元々金銭感覚なんて持ち合わせてないんだから」

「どうやって支払ってもらったの」

「それがねえー」

私の大伯母に当たる神楽坂のオカツさんは、可笑しそうに表情を崩した。

「先生、いいかげんにお願いしますよ、って言うと、『筆と墨を持って来い!』、って言うのよ」

「ええー、それで？」

一緒に話を聞いていた私の叔母の真紀子さんも膝を乗り出す。

「悠々と羽織を脱いで裏を返して、畳の上に広げるとね、裏地の白い絹の上に一息でさあっと富士山の絵を描いてしまうの」

「へえー」

「うちの亭主が後ろから小筆を差し出して、『どうぞお名前を』、って頼むと、『うむ!』、とか言って、うやうやしく「大観」と署名してくださるのさ」

「あらあー」

さしものお転婆な叔母も二の句が告げない。

「でも、それを売ったりしないのでしょ」

「当たり前よ、絵が見えるように裏返しのまま衣桁に掛けて、特にご最頂のお客様が来た時だけ、奥の座敷に出して飾って置くのさ」

軽く前をふくらませて自分で結い上げた鬢のほつれを、片手ですいと撫で上げると、50歳を過ぎてなお粋な風情の大叔母さんは、得意げに笑ったものだ。

昭和30年、私は小学校に上がったばかり。同居していた祖母の妹であるオ

カツさんは、時々やって来ては母や真紀子さんも交えて昔話をしていた。

「まったく惜しい事をしたねえ、みんな空襲で灰になって・・・」

黙って聞いていた祖母が思わずため息をつくと、

「なあに戦争で負けたんだもの、仕方がないさ。どうせお茶代なのだから」
さすがは江戸っ子のオカツさん、くよくよと残念がることなどなかった。

昭和の始め、神楽坂の水茶屋の一人息子の元に嫁いだオカツさんは、持ち前のさっぱり気質と機転の利いた客さばきで、たちまち人気の若女将になった。

水茶屋とは喫茶店のようなもので、女客はおしゃべりに、男の客は夕方の暇つぶしにと、お酒とは無縁の甘味処はなかなか繁盛していたようだ。

ところで話題の「大観」さんとは、日本画の巨匠、横山大観のことである。

場所柄、粋筋の人や作家さんや人気商売のお客も多く、大観さんのような日本画家も良く出入りしていたと言う。

それにしても豪快な話しである。戦争が始まる前の東京の繁華街には、まだまだ人情に厚く、心意気に感じる空気が流れていたのだろう。

今年、令和五年五月、夫と私は「家康の三名城」を巡るツアーに出掛けた。

三名城とは、浜名城・長篠城・岡崎城という触れ込みである。

NHKの大河ドラマの影響もあり、行く先々で徳川家康の業績と出会う。

その道中で今更のように気付いたのは、家康の本拠地であり晩年を過ごした駿府と言う一国は、かの富士山のお膝元にあるということだ。

旅の終りに「静岡県富士山世界遺産センター」に立ち寄った時、私はそれまで考えた事もない思いに捉われた。

「まあ、富士山の絵ばかりがこんなに沢山、懐かしいなあ・・・」

うん？ 懐かしい？ 家康さんじゃあるまいし、私の故郷は富士山のふもとではないのに・・・。(江戸城には近かったけれど)

そういえば、幼いときからお絵かきというと、何となく「ふじさん」型の山の絵を描いていたかも知れない。杉並区に住んでいた頃に通っていた小学校付近の高台に登れば、冬の晴れた日には富士山が見えたのではなかったか。

それに、そのころ行っていた銭湯の湯殿の壁には、大抵富士山の絵があった。

そして、中学生のときに移って来たこの日野市からは、浅川越しに遮る物の

無い、すっきりとした美しい富士山を望む事ができるのである。

山梨でなくても、静岡でなくても、富士の姿は心に馴染んだ風景なのだ。

島根県安来市の足立美術館には、120点もの横山大観の作品があるそうなので、いつか訪れたいと思っている。

できれば一度は見てみたかった、大観さん直筆の「神楽坂の富士山」の絵を。心の中の何処かで思い描きながら。



鯉の煮付け

坂井 繁子

「あらっ、鍋ごと？ 鍋ごと持ってきて下さったのですか？」

横浜の義母の声は、一オクターブ高く、しかも戸惑いを隠さなかった。

私が長女を出産した時の話だ。

5日間の産院入院後、私たちは夫の実家に身を寄せていた。1月8日に誕生した赤ん坊の父親である夫は、その2週間程前のクリスマスイブの日に、5カ月半の放浪の旅を終え、インドから帰ったばかりだった。山形の私の母は、そんなところにやってきたのだ。

上野駅で、当時東京に出てきて予備校に通っていた私の妹に迎えに出てもらい、横浜の家に案内してもらいやってきた。手には大事そうに、鯉の煮付けが入

っている鍋を包んだ風呂敷包を抱えている。

包を解くや、義母から出たのが「あら、鍋ごと！」の声。そして、それが鯉の煮付けと聞くや、正直な義母は、困惑したように、「うちは川魚が苦手なんですヨ」と言った。

すると山形の母は少し飲み込んでから、「うちの方では、お産をしたら鯉を持って行って、産婦に一匹丸ごと食べてもらうのが習わしになっているのですヨ」と、つまり、この鯉の煮付けは、お産をしたばかりの私に食べさせるための物だと言う事を、多少の申し訳なさを含めて説明した。鍋で持って来たのは、当時電子レンジなど家庭になかったから、そのままコンロに乗せて温めれば、横浜の義母の手を煩わせないだろうという、いかにも山形の母らしい発想からだった。

山形の母は二階に上がって「どれどれ」と赤ん坊を見ると、「上手に産んだなあ、昔は小さく産んで大きく育てると言ったもんだ」

私の赤ん坊は 2 千 7 百グラムほどで生まれた。ぷっくりとくびれのある赤ちゃん像にはほど遠く、小さくて痩せていて鶏の足の様なしわしわな手足をしていた。こんな痛々しい姿で産んでしまって申し訳ないと、赤ん坊に謝っている私だった。それでも盛んに手足を伸ばしたり縮めたりしている赤ん坊を見て、「しっかりした赤ちゃんだ。あんたが栄養をとって、お乳をしっかり飲ませれば、ぐんぐん太って来るちゃ。大丈夫だ」といてくれた。そして、横浜の家族に「宜しく願います」と挨拶をすると、再び、妹に連れられてその日の宿である戸塚の姉の家に戻って行った。

鯉の煮付けは、煮汁を加えて温め、川魚の苦手な家族の中で、会津出身の義父が、美味しそうに一緒に食べてくれた。嫁いだ娘が子供を産むと、鯉を届けて丸ごと一匹食べさせる風習がある事は、その後姉から聞いたが、さらに山形に住む叔母の話はこうだった。

「お嫁さんがお産をしたら、もう産む前から、あれもだめ、これもだめとやってはいけない事がいっぱいあってヨォ。食べ物もそうだ。あれも食べてはいけない、これも口にしては駄目と、ダメな事ばかりだったナァ。五平んとこなんか、あのばあちゃんが、嫁さんに味噌もいけないと言って、赤ん坊産んで寝ているのに、おかゆと塩だけだったというもの」

「どうして？ それじゃあ、お乳も出ないどころか身体が回復しないでしょ

うに」

「ただ寝ているだけなのだから、そんなもんでいいという事だったのかねエ！」

「そうか、だから嫁がせた娘にお祝いという口実で鯉を届け、しかも一匹丸ごと産婦が食べるものだという風習にして、娘を守ったんだベナァ」と。

私が育った山形の内陸地方は海から遠く、川魚が大切なタンパク源だった。中でも鯉は養殖されていて、お祝い事があれば必ずとっていいほどお膳に乗ったものだ。養殖されている鯉のえさに、養蚕地帯でもある私の田舎では繭から糸を採ったあとに出て来る蛹（さなぎ）とか、私たちが小学校の頃、学校行事としてやっていたイナゴ採りのイナゴも、餌になっていたようだ。

イナゴ採りの日、手ぬぐいで作った袋に、イナゴを捕まえて学校に持って行く。先生は大鍋というかドラム缶にお湯をわかして待っているのだが、持ち込まれたイナゴをお湯の中に入れて茹で、それからムシロの上に広げて干し、干しあがった物を養殖場に引き取ってもらうのだった。

私は父が鯉を捌くのをよく目にしていた。大きな桶の中で泥を吐かせておいた鯉をまな板の上に乗せ、動き回らないように、まず出刃包丁の背で眉間をたたいて気絶をさせてから捌くのだが、お腹から傷つかないように胆のうを慎重に取り出す。これが破けると、ひどく苦味になるし毒もあるらしい。

叔母はこれを薬としてオブラートに包み飲み込んでいたが、大丈夫だったようで、百歳の天寿を全うしている。胆のうなのだから、胆石に効くらしい。

鯉の煮付けは筒切りにしてある。筒切りとは胴の丸い魚を丸ごと均等な輪切りにしたものだ。内臓も鱗も付いたままだ。大鍋に水と酒、みりん、砂糖を入れて煮立て、そこに鯉を静かに入れて行く。時間をかけてじっくりと煮込み、火を止めてから一晩おいてから食べた。内臓はコリコリと、鱗はサクサクとして実においしい。

私は、鯉の洗いも大好物だ。鯉を刺し身状にして、それに熱湯をかけたなら素早く氷水に入れる。パリパリ、プリプリの独特の食感だ。父が作る鯉の洗いは絶品だった。

他にも、鯉料理の思い出は沢山ある。会津の東山温泉の宿では、食卓に並んだ食べ切れない料理のうち、鯉の煮付けを真空パックにしてテイクアウトにしてくれた。

『中山道を歩くツアー』に参加したとき、信州・佐久の昼食でも鯉の煮付けが出た。土地の名物らしく、私の田舎と同じく筒切りで内臓も鱗もついていた。しかし食事が終わって席を立つと、食卓には随分手つかずの鯉の煮付けが残っていた。やはり、川魚は苦手という人が多いのだろうか。もったいなくて、持って帰りたい気分だった。

これからも、あちこちで鯉の煮付けに出会いたい。鯉は、私のソールフードだ。

鯉は小さく産んだ子供を大きく育ててくれた、絶品のスタミナ料理なのだから。



おかしな遺品

浅川 清流

「こら！ テノール、しっかりしろ！！」

ベースの小林大先輩の怒鳴る声が響く。一瞬、練習場が静まり返る。一緒に歌っていた仲間の視線が小林先輩に注がれた。

怒るとベース独特の低音の響きが増し、まるでヤクザの親分のようなドスの利いた声がした。

15年前、同じ大学のグリークラブの卒団生たちがシニアの男声合唱団を結成し、先輩は中心的な役割をしていた。

その小林先輩が喉頭ガンを患い、治療のために練習を休むようになったのは5年前のことだ。

それでも治療の合間には時々顔を見せ、「今日は、声が出ないので歌えないが、皆の練習ぶりをここで見ている」と、練習場の片隅で黙って椅子に座って聞いていた。おそらく、仲間の練習を見ているだけで楽しかったに違いない。

夏の、ある日のことだった。練習を終えた後、居酒屋で小林先輩が吠えた。

「うーん、俺も飲みたい！」

冷えた生ビールを、仲間達がおおいそうに飲んでる姿を見て、我慢が出来なくなったのだろう。

「えーい、飲んじゃえ！」

生ビールを注文し、一気に飲み干してしまった。

もちろん、医者から喉に刺激を与えるアルコールは、飲んではいけないと言われていたはずだ。啞然とする仲間を尻目に、「美味しい！」と叫んだ。しかも、その顔は嬉しさに満ち溢れていた。

そして、ワイワイと談笑している最中に、先輩は突然私にこう言った。

「浅川君、これを何処かに処分してくれないだろうか」と言って紙袋を差し出した。開けてみると、中には先輩が集めた外国製の無修正のエロ写真や雑誌、八ミリの映画フィルム、そしてアダルト・ビデオが沢山入っていた。居合わせた仲間もびっくりしている。やがて、皆ニヤニヤしながら小林先輩を見ている。

「これは、どうしたのですか？」

「いや、俺が死んだあと、こんなものが家から出てきたら、息子たちに笑われてしまうからなあ」

すでに、先輩は死を覚悟していたのだろう。真剣な顔でそう答えた。

「浅川君、頼むからどこかで処分してくれ」。戸惑う私を押し切り、そう念を押した。

私はこのとき、小林先輩を軽蔑の目で見るとはなれなかった。それどころか、たまらなく人間臭さを感じ、今まで感じたことがなかった親しみさえ覚えた。若いころ、私も親に隠れて、こっそりエロ本を読んだ記憶がある。そのことが一瞬蘇ったからだ。

この事件の半年後、小林先輩にさらなる悲劇が襲った。最愛の奥さんがすい臓ガンで倒れ、あっという間に亡くなってしまったのだ。自分がガンの治療中だった先輩は、まさか自分より先に奥さんが旅立つとは夢にも思わなかったに違いない。あの品物を私に託したのも、その思いがあったからだ。

先輩は気丈にも奥さんの葬儀を取り仕切った後、しばらくして練習場に姿を見せ、私にこう言った。

「浅川君、俺は寂しいよ」

私はこの言葉に、どう答えていいか判らなかった。奥さんに先立たれ、悲しみに暮れる先輩を慰める言葉を見つけることが出来なかった。

「また一緒に、皆と唄いましょうよ」

ただ一言、そう言った。この時の会話を、私は今でも鮮明に覚えている。

そして小林先輩は、ついに逝ってしまった。

後日、私は天国にいる先輩にこうつぶやいた。

「小林先輩、残念ながら八ミリの映写機がなくて、あのフィルムは見られませんでした。しかし他の物はもう一度、私はドキドキしながら全て拝見し、そのあとで捨てましたのでご安心ください」

すると、何処からか、あのドスの利いたヤクザのような声が聞こえてきた。

『浅川、お前もスキだなあ！』

尋ね人の時間です

戸部内 杏・作 とべない あん 代読・久保島 菜穂子

『バケツに水入れて、両手に持って立っときんしゃい！』

利子先生は叫ぶ。

『ホッ？』、私はキョトンだ。

「なにしょったん？ 昼休みはもう十分も過ぎとるよ」

「掃除しょったんです」

「掃除は放課後にするんが決まりじゃろ」

「みんな早よ帰りたいかったんです」

『『今やろう』って言うたんは、杏(あん)ちゃんじゃろ？』

「はい」

「じゃ代表として廊下に立っときんしゃい」

「ハイ」

『だけど言い出しっぺは私だが、みんな早く帰りたいかったのだけどな』と思いつつ私は廊下で〈立たされ坊主〉になった。

先生が教室に入ると私はそっとバケツを下ろした。ガラガラと教室の引き戸がきしみ始めると、私はサッと水の入ったバケツを持ち上る。先生は私の〈ズル〉はお見通しのように、わざと大きな音を立てて廊下に出てきてくれた。

「もうバケツを下ろして教室に入ってきんさい。昼休みはちゃんと休むこと。杏ちゃん、みんなを悪い方向に引っ張っていっちゃいけんよ」

「はい」

私には悪いことを企だてて、先導したという気持ちはサラサラなかった。下校時にすぐ帰れるように昼休みに掃除をしておもうとしたただけだ。掃除が十分間も、午後の授業に食い込んでしまったのが失敗だった。

「あなたは気付いてないかもしれんけど、リーダーシップの取れる子だと先生は信じとるよ。いい方向に皆を引っ張って行ってちょうだい」

私は叱られているのか励まされているのか分からなくなり、少し動揺してしまった。

私は満洲の生まれであること、妹は訳ありの養女であることなどで、あからさまではないが、世間の冷たい目にさらされて育ってきた。

私は皆の中でなるべく目立たぬように、そっと生きるようにしてきた。だが、心の中ではいつも刀を磨いており『攻撃してくる奴はみんな殺してやる』、くらいの怒りを抱いて暮らしていた。私はみんなの中で孤立していると思っていた。

「杏ちゃん、あんたバケツ、下ろしとったじゃろ？」

教室に入る前に先生は小さい声でそう言い、ニッと笑った。やっぱりバレていた。

「はい」

私もニッと笑った。

私は呉市の小学三年生。利子先生は、三十代半ばの穏やかな先生だった。先生は私のねじれた心を交換ノートで少しずつ溶かしてくれた魔法使いだった。

「思っていること、感じていること、考えていることなど何でもいいよ。悲しいこと、嬉しいこと、楽しいこと、笑っちゃうこと、私に言っときたいこと、言いつけたいこと、言い訳したいことなんか、なんでもいいよ」

私はせっせと自分の気持ちをさらけ出し、先生も本気で私の気持ちに寄り添ってくれた。

「はい、小説家の卵さん。頑張れ」。先生はいつもそう言ってノートを返してくれた。私はワクワクと先生の赤ペンで書かれた〈ことば〉をかみしめて、にこにこしてしまった。口ではなかなか言えないことを、文に書いて表現することの楽しさを教えてくれたのが利子先生だった。

人の目を見て話すことのできない私は〈文〉の中で自由に動き回れることが楽しくて仕方がなかった。先生は今の私を作ってくれた大事な大事な人だ。私の心のお母さんだ。

で、何でそんなに早く帰りたかったかというと、ラジオ番組の『鐘の鳴る丘』を歌のところからしっかりと聴きたかったからだ。私たちはその時間になるとラジオの前にどかりと正座し、ドキドキしながら子供たちの会話を楽しんで聞いていた。戦災孤児になった子供たちが孤児院でたくましく明るく元気に生きていくというドラマだった。聴いているだけで私たちも楽しく元気になっていくような気がした。

『緑の丘の赤い屋根』

トンガリ帽子の時計台

鐘が鳴りますキン コン カン

メエ メエ 子ヤギも鳴いています』

昭和 26 年。小学校三年生の私は帰宅するとすぐにラジオにかじりついた。うかうかしていると聞きのがすことがあったのだ。

私にはこの『鐘の鳴る丘』の後にある『尋ね人の時間』も大事な時間だった。この番組は戦争の混乱で行方の分からなくなった人々を探す切実な【訴えを伝える】時間だった。

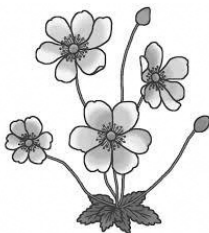
満州で、私の母がおっぱいを分けてあげた男の赤ちゃんは、元気に日本に帰れたのだろうか。その子のお母さんはおっぱいが出ず、母は余るほどたくさん出たので分けてあげたのだそう。私とは乳母兄妹になる。岡山県出身のお母さんが、毎日器を持っておっぱいをもらいに来たそう。

終戦の三ヵ月前に B 2 9 が飛び交う空の下を、同じ船で日本に戻ってきた負傷した軍人のお兄さん。「ぶぶ（水）が飲みたい」と駄々をこねる私に博多駅付近の道を、水を求めて暗闇の街を、民家を訪ね歩いて水をもらってきてくれた。あのお兄さんは、元気に生きつづけているだろうか。

私にも尋ねたい人がいっぱいいるが、なすすべもなく『尋ね人の時間』をただ静かに聞いているだけだった。終戦から 6 年もたっているのに、愛する人を、世話になった人を探す人たちは後を絶たなかった。

私はこんなに平和にのんびりと暮らしていいのか？ あれがない、これが欲しいと不満ばかりを心にため込んでいて、いいのだろうか。

私はそんなことを考えながら正座して、涙を流しながらラジオを聴いていたように思う。



白いカーネーション

松下かほる

「あんたのカーちゃん、焼け死んだんだってナァ。あんた、戦災孤児になっちまって。可哀想に」

栃木の疎開先でのことだった。同級生の町子ちゃんの母親は畑仕事から帰ったばかりなのか、野菜が入った背負(しょい)かごを下ろしながら私にそう言った。それから、「町子はこんなカーちゃんでも、そばにいてイがったナァ」。そう言いながら、泥のついた手で町子ちゃんを抱きしめた。

私はその光景が羨ましかった。そして自分が惨めで悲しくて、裏口から外に飛び出していた。

「さつま芋、喰ってけ！」

声は聞こえたが、私は泣きながら家に向かって駆けだした。涙で汚れた顔を見て、祖母は「どうしたの」と尋ね、私は町子ちゃんの母親に言われた事を話した。

「かほる、あんたは孤児ではないよ。優しいお兄ちゃんが二人もいる。お婆ちゃんだっているじゃないか」

祖母の膝に顔を埋めて泣いている私の背中を撫でながら、祖母が声を詰まらせながら言った。私はそんな優しい祖母に、

「お婆ちゃんは、お母さんじゃない!!」

言いながら、私は祖母の膝を何度も何度も叩いた。祖母は叩かれながら、「代わってやれるものなら・・・」と言いながら涙をぬぐった。私は思わず祖母に抱きつき、「お婆ちゃん、ごめんなさい」。肩に顔を埋めながら謝った。

疎開先での悲しい思い出の一つである。

昭和 21 年 4 月。終戦から半年が過ぎていた。父は 3 歳のとき病気で亡くなり、母は一年前の東京大空襲で命を落としていた。

祖母と私は疎開先の栃木の寒村を引き揚げ、東京都田無町に移り住んだ。知人の家に下宿していた二人の兄も合流し、私は田無小学校の 5 年生として転校していた。

昭和 22 年 5 月のことである。5 月の第二日曜日はアメリカに倣(なら)い、

日本でも『母の日』が制定された。

下校の時、担任の伊藤一郎先生がカゴに入ったカーネーションの造花を持って教室に入ってきた。そして『母の日』の説明をした。

「今日は5月10日の土曜日です。明日の11日は5月の第二日曜日で、この日が『母の日』になりました」

突然のことで驚いた私たちは何事だろうとざわついた。先生は「静かに!!」と黒板を叩きながら、「みんなはまず、赤いカーネーションを胸につけて下さい。そして日頃お世話をして下さるお母さんへの感謝の気持ちを現わして下さい。それから明日、どんなお手伝いをしてあげるかを考えましょう。・・・お母さんが亡くなった人は白いカーネーションを付け、在りし日のお母さんを偲んで下さい」

そう言い終わると伊藤先生は、一列に並ばせた生徒たちに赤いカーネーションを付け始めた。

私は新しい学校に代わったら、母がいない事は決して言うまいと心に決めていた。疎開先の町子ちゃんの家で、忌まわしい出来事があったからだ。だから今日、胸に白いカーネーションを付けられたら、母のいない事が皆に知られてしまう。

カゴの中を覗いたが、白いカーネーションは見当たらなかった。『よかった』。私は胸をなでおろした。しかし段々と造花が少なくなっていくカゴの底に、ちらりと白い物が見えた。私は咄嗟に忘れ物をした振りをして列を離れ、こっそりと列の最後尾に並んだ。

先生は一人一人に「明日は何のお手伝いをして上げるのか」を聞きながら、赤いカーネーションを付けている。そして最後に私に白いカーネーションを、何も言わずに付けてくれた。

私は教室を出るなり、胸のカーネーションをむしり取った。それから運動場を横切り、裏門めがけて駆け出した。「ドッジボールをしようよ!!」という声を振り切り、家に向かって駆けだしていた。

家に着くなり私はランドセルからクレヨン函を取り出した。赤いクレヨンを手にするると白い造花を赤く塗りたくった。白いところが無くなるまで、表も裏も、隅から隅まで、何度も何度も塗りつぶした。

やがて赤いカーネーションが出来上がった。それを胸に付け、鏡の前に立つ

た。

「アッ!」、と声をあげていた。

造花をカーネーションにつぶしたためか、カーネーションはグッタリとしてしまい、枯れかかった花のようにしおれていた。

祖母が来て、鏡の前で呆然としている私を不審に思っか、訳を聞いてくれた。そして、

「そんな赤白の差別をしなくても、母親のことなど一日だって忘れたことなど無いのにねえ。でも大丈夫。月曜日には誰もそんなもの、付けては来ないよ」と言った。

それから祖母は私を台所に連れて行き、配給された小麦粉に家で取れた卵を混ぜた「お焼き」を「さあ、お食べ」と言って差し出した。

「かほるはねえ、母親がいない事を知られるのが嫌だというけれど、あの東京大空襲で亡くなった人は 10 万人もいるのだよ。かほるはお母さんの事よりも、人に同情されるのが嫌いなのだと思う。同情を嫌うあなたは、とても良い心がけの子供だとお婆ちゃんは思う」

そこに兄が大学から帰って来て、三人で「お焼き」を頬張った。香ばしい匂いが台所にただよっていた。

兄が映画の「白雪姫」のパンフレットを出して、今度の休みに連れて行ってやるといった。

私は白いカーネーションのことなど、もうどこかに吹き飛んでしまっていた。



ドウブロヴニクの少女

由佐 豊子

夜の9時、誰かがドアを叩いている。

ドアを開けると、ほっそりとした40歳前後のやつれた女性が立っていた。宿主の夫人である。その腰に10歳ほどの少女が縋りついていて、『ああこの少女はこの宿の子供だったのか』

ここはクロアチア・アドリア海沿岸のドウブロヴニクのB&B（朝食とベッドのみの宿）である。私が訪れたのはセルビアそしてボスニアとの紛争が治まって12年が過ぎていた、2007年の夏であった。

ドウブロヴニクのオレンジ色の屋根の旧市街には、すでに夏の碧い夕闇が下りていた。

その碧い夕闇の中に立っていたのがこの少女と妹だった。私たちを乗せた車を見ると、姉妹ははじける喜びで飛び上がり、両手を振った。車内に温かい空気が一瞬強く流れた。運転手にはなんのアクションもないのに、車内に強い波動が生じた。それは体中で心と心を交し合ったような波動だった。そうか、姉妹は宿主の子供だったのか。姉妹は父の帰りを待ちわびて、たそがれの街角まで迎えに出ていたのだ。

今、ドアの外で、母のスカートをしっかり握りしめている少女を見て、私はあの時の強い波動を再び感じた。

宿主である男性は私たちを宿である自宅に下ろすと、「今から仕事に出かけなければなりません。妻は仕事から夜の9時には帰ります。それまでは子供二人が留守をいたしますが、姉のミラは英語が多少解りますから用事があれば娘に言ってください。妻は私より英語が話せます」と言い残して、道路舗装の夜の仕事に出かけて行った。今、ドアの外に立っている女性がその妻であり、娘は自分の名前はミラだと教えてくれた。

妻は宿のシャワーの使い方などを細かく説明した後でこう言った。

「私は昼間の仕事から今帰りましたが、明朝3時半には市場の仕事に出かけます」。女性はミラのプロンドの髪に手を置きながら話しを続けた。

「それで明日の朝食はこの子が準備をいたします。今は戦後で貧しくて、夫

も私も昼夜にわたって働かないと暮らしていけないのです。この子、ミラは英語を少しは話せますので、洗濯ものなどがあれば申し付けてください」と言った。

私たちが宿泊するこの部屋は、姉妹の子供部屋だったが、家族全員で掃除をし、壁紙を張り替えB & Bの部屋にしたのだという。父親も母親もいない時間、10歳のミラは5歳の妹ベラの面倒を見ながら、家事をこなし宿泊者の食事を作る。そして夕闇が迫り家の中が暗くなり始めると、両親のいない家の中のわびしさに耐えきれず、妹を連れて街角で父の帰りを待つのだ。

私と旅友の順子さんは今朝、クロアチアのプリトウイツエの村から長距離バスに乗り、9時間かけてここにたどりついた。夏だというのに車窓からは行けども行けども、草も生えていない赤茶けた荒野が続いていた。その荒野に屋根が吹き飛ばされた廃屋がぽつんぽつんと在った。そして道路わきには、地雷注意の黄色のドクロマークが続いた。

途中一カ所のみ緑色の肥沃な土地があった。それは隣国ボスニアの一部がクロアチアにはみ出している土地だった。緑の大地にほっとして、私はボスニアの市場に降りた。あふれている豊富な農産物の中からスイカを選び、私は長旅の喉を潤した。

ドゥブロヴニクの新市街に着いたのはもう夕方だった。バスが止まるや否や、ウエルカムの札を胸にぶら下げた人々が、バスの降り口に押し寄せてきた。泊り客をつかもうと喧嘩もおきかねない勢いである。私たちはその群がる客引きの中からこの宿に決めた。男性は客引きになれていない様子だったのと、陽に焼けた顔に誠実なものを感じたからだ。

翌朝、ダイニングに行くとサンドイッチと紅茶が用意されていた。まな板の上に切り落とされたパンの耳があった。5歳のベラが、背伸びをして手に取り、口に運んでいる。私たちがスルギ山に登ると言うと、10歳のミラは紙切れにドクロマークを書いて黄色く塗り、「ケアフル！ アテンション！！」と、けなげに危険を私たちに伝えた。

私はメモ用紙の一枚で紙風船を折り、姉妹と紙風船を飛ばして遊んだ。終わりに紙風船をぺたんとなたんで平にして、ポケットに入れる仕草をし、再び取

り出し、息を吹き込み膨らませた。

ミラもベラもそれが面白いらしく、はにかんだ表情で笑いながら、自分たちも紙風船をペタンとたたんだり膨らませたりを繰り返した。次に折り鶴でも同じことをすると、姉妹は「もっともっと」とせがんできた。私はユリの花と兜を折った。姉妹は平面にしたり立体にしたりを飽きもせずに繰り返して喜んだ。

私たちはどこの町を訪れてもまずは高台か高層ビルに上る。そこから街を一望し、初めての街を明日からどう歩くか検討をつけた。ドゥブロヴニクの旧市街を見下すには412メートルのスルギ山が最適だった。

ドクロマークのあるスルギへの山道は焼けつく暑さだった。山道を登る人は誰もいない。頂上にも人気は全くなかった。頂上のケーブル駅は爆破され赤茶けた鉄骨が垂れ下がっており、レストランも廃屋であった。しかし、眼下に広がる紺碧の海とオレンジ色の屋根の旧市街は奇跡的な美しさであった。戦後、街の人々はまず絵出で瓦礫を集め、旧市街の復興に手を尽くしたと聞く。

コロナ前の2020年頃のニュースであるが、アドリア海の真珠とうたわれるドゥブロヴニクはいま世界的な観光地となり、スルギ山にはケーブルが運航し展望レストランは観光客でごった返しているという。もちろん立派なホテルもたくさん出来ている。

クロアチアへの旅から16年。

クロアチアは東ヨーロッパに位置し、ウクライナに近い。働き通しだった両親は、そしていま26歳になった姉のミラは、21歳になった妹のベラはどうしているだろうか。ロシアのウクライナへの侵略とどう向き合っているだろうか。

ミラとは「平和」、ベラとは「純白」という意味だ。

両親が願いを込めた名前のとおり、ミラとベラの生涯には『純白の平和』が続いて欲しい。いやミラとベラの子供たちの世代にも、ずっとずっと平和が続いて欲しい。私はいま、そう願っている。



ひもじい

角川 洋子

「検閲じゃー！」

大声で警官がどやどやと、私の乗る車両に踏み込んでくる。

「怖いよう・・・」

昭和二十一年、四歳の私はねんねこに包まれたまま、母の背中にしがみつく。
ヤミ米の摘発のための検閲だ。

「おい、その袋の中にゃ、何が入っちゃるんね」

警官は乱暴に母の持つ手提げ袋を警棒で突つつく。

「この中にゃ、この子と私の弁当やら、上に着るもんが入っとります」

「ほんまか」

疑わしそうな目付で母を睨む。

「ほんまですよ。袋の中身、ここに全部ぶっちゃけましょうかのう」

私はちじみ上がる。

袋の中には田舎のチクばあからもらった大事なお米が入っているのだ。警官は母の啖呵にちょっと驚いたのか、「まあ、ええわい」と警棒でトントンと自分の肩を叩きながら次のブースに移って行った。私は凍りついたように息も絶え絶えの状態から、そろりそろりと現実に戻された。母の手提げ袋の中だけではなく、私は母の背中で米の入った信玄袋を一つしっかりと隠し持っていた。ヤミで手に入れた米や野菜は見つければ即没収される。貰ったものでも没収される。くれた人まで罰せられる。

列車の中は叫び声や罵声で騒然となる。そして泣き声が聞こえてくる。

「あの米がのうなると、もう食べるもんが何にもないんよ。家族四人、皆死んでしもう。どげんしたらええんかのう」

「わしら全員、死ね！ って言われとるんと同じじゃ」

「ほうじゃ！」

「ほうじゃ！」

「雑草やら草や木の根っこやら昆虫やら、何でも食うて命を繋げとるのののう」

「これ以上何を食えつうのののう」

私は母の背中で疲れ果て、黙ったまま、涙だけが勝手に流れているのを感じていた。ねんねこの黒い縁の上に落とした涙がころりと丸まってコロコロと下に走っていくのを呆然と目で追っていたのを覚えている。

母と運んできた米は無事だった。だがよかった、嬉しいという気分には到底なれなかった。

この米はチクばあの育てた大事な米だ。私たちの命を支えてくれている貴重な米だ。チクばあは、母方の祖母の姉だ。

チクばあの暮らす村は広島県三原市の奥にある。そこからバスで三原市に出て、そこから呉線に乗り換え呉駅まで戻ってくる。村でバスに乗ったとたん、

「三原の駅前のバス停で検閲をやっとる。ちいと手前で降りた方がええど」と車掌さんが情報をくれる。母と私、そして買い出しに来ていた人が二、三人、駅の五つ手前のバス停で降りた。駅までの三十分の道のりをてくてくと歩いた。重い荷物を持ち、汗をふきふき、やっと列車に乗ったばかりだった。ほっとしたところの突然の検閲だった。

「あーあ、母ちゃんに食べさせるもん何にもないんよ。どーしょ」

娘さんは泣き疲れ、悄然と瀬戸内の美しい海を見つめている。米は没収されてしまったようだ。母は米を隠し持っていた袋から朝握ってきた大きな握り飯を二つ、何も言わずに娘さんの膝の上にそっとのせてあげた。娘さんは言葉もなくお辞儀をして涙を流した。

列車はまたトンネルに入っていく。呉線はトンネルだらけだ。蒸気機関車が煙やすすと、流した涙でみんなの顔がぐちゃぐちゃになっている。それがおかしいとみんなで静かに笑いあう。

買い出し列車は、行きは都会から着物や高価な装飾品を乗せ、帰りは米や野菜などを乗せて走り続けた。取引は物々交換が基本だ。

買い出しに行けない人は、ヤミ市を利用せざるをえなかった。ヤミ市は正に『闇』の世界だ。代金は高いし（市価の三倍位）、どんだんうなぎ上に上昇していく。衛生面でもかなり問題だった。商品は近くの農家から買い上げ販売しているもの、PX（駐屯地売店）から手に入れて売っているもの、兵隊から直接手に入れた古着や古毛布、タバコや菓子類などがあつた。

屋台のような店もあり、そこではPXの食堂から出た残飯や捨てられた骨や肉片を油などでグツグツと煮て、その中に小麦粉を溶いて丸めて団子にしたも

のを入れ、またゴトゴトと煮込んだ「だんご汁」や、米はほんの少々で麦が主役の「雑炊」が堂々と売られていた。おいしそうな匂いがする「だんご汁」や「雑炊」の中から英字新聞の切れ端や穴の開いた靴下、草鞋の切れっ端まで出てきたという。

「グツグツ煮込むけん、ばい菌もみんな死んじまうで平気じゃ」「以外とこれおいしいんよ」「これ食わんかったら、わしゃもうとっくに死んどるわい」

我が家ではチクばあのおかげで何とかひもじい思いをせずにはすんだが、年に何度か、買い出し列車の『検閲』の恐怖は味あわねばならなかった。そのたびに凍り付き、気が遠くなりそうになった。あの光景に慣れることはなかった。

公的には食料や日用品は配給制だった。ただし〈何が〉〈いつ〉配給されるか分からなかった。配給には切符が配られた。手袋を買うには切符3枚といったぐあいだ。米は一人一週間にお椀一杯だけ。それも配給のないときもあるのだ。

「お上はこれで生きていけると思っとるんじゃろうか」、母だけではなく日本中の庶民たちはそう思っていたことだろう。

『没収された米は、いったいどこに行くんじゃろうか』。私は子供ながら不審に思っていた。

この時代、ヤミ米の売買は「正義」に反することだった。犯罪だった。だがそんなことを全くせずに生きていけたのだろうか。

『ヤミ米なしで生きていけるはずがない。僕はそのことを身をもって証明します』と一切のヤミ米、ヤミ物資を食べずに生活し、衰弱して死んでいった判事さんがいたそう。私は成人後その話を聞いた。彼の死は生かされたのだろうか。当時そのような報道はされたのだろうか。伏せられたのだろうか。

私たち庶民は『生きること』が根本的な『権利』であり、『義務』であり『正義』ではないだろうか。これは国や時代や権力者などによって変えられるものではないと思う。

検閲という言葉を書くたびに、私は今でもゾワゾワと鳥肌が立つ。パンパンと両手で頬を打ち、ブルっと身震いをする。そして、やっと自分を取り戻す。

戦時下の日野を語る

川嶋 博・作 代読・海野 靖雄

昭和 19 年。私が 14 歳の時のことです。

当時、世の中は食糧不足でした。国は国策として食料の増産を打ち出し、私達国民学校の生徒は東京府中にある「東京競馬場」の開墾に駆り出されました。

国鉄・南武線の「府中本町駅」から徒歩で競馬場に行き、西門から中に入ります。まずゲートからスタンドまでの広場一帯の芝生を取り除き、畑を作りました。開墾した土地に畦(うね)を作り、じゃが芋やサツマイモを植えます。

皆は汗と土で顔を真っ黒にしなが、しかし文句一つ言うことなく作業をしました。その後も連日草取りなどが続き、大変な日々でした。

競馬場のスタンドの内部では、軍部の通信部隊が発電機を使って通信の訓練を行っている光景を目にした事もあります。

そして農作業が終わると我々は唱歌や軍歌を唄いながら府中本町駅へと向かうのですが、そのとき一人の同級生が「明日、雨が降るといいな」と言いました。なぜかと尋ねると、「雨が降れば学校に行って、勉強ができるじゃないか」と言うのです。

私は返す言葉がありませんでした。結局、我々は終戦を迎えるまで、学校に戻る事はありませんでした。

昭和 12 年。私は東京府南多摩郡小宮町にある「小宮町第一尋常小学校」に入学しました。この頃小学校は 6 つぐらいの町で一つの小学校が作られていたのですが、昭和 16 年、小学校 5 年生の時に小宮町が八王子市と合併したため、小宮町第一尋常小学校は「八王子市立第八国民学校」に改称されました。現在の「八王子市立第八小学校」の前身です。

この年に制定された国民学校制度とは軍国主義教育の徹底のため、尋常小学校が 6 年制の「国民学校初等科」に、高等小学校が 2 年制の「国民学校高等科」に改められたものです。

私達が東京競馬場の開墾にかりだされたのは、国民高等学校 2 年生の時です。学校は男女別で、男子組には 59 名の生徒がいました。その後も開墾作業は続き、夏には軍馬の飼料となる「干し草づくり」を命じられた事もあります。

昭和 19 年から 20 年にかけての事です。

「東部軍・管区情報、東部軍・管区情報。敵機 B29 の編隊は御前崎の上空から東京上空にかけて飛行中」

夜になるとラジオからは「警戒警報」「空襲警報」が毎晩のように聞こえてきます。そのたびにそれぞれの家では防空頭巾を被り、防空壕や山の斜面に壕(ほり)を掘ってそこに隠れたものです。

いまにして思えば同じ 14 歳でも、労働力の不足のため軍需工場に学徒動員された学生たちは空襲や原爆で 1 万 1 千人もの人たちが亡くなっていたのですから、畑の開墾に駆り出された我々は恵まれていた方かも知れません。

しかし時代は子供心にも暗く不安な日々となり、どうやら戦況は日々悪化しているようでした。

私の家は野菜や養蚕を営む農家でした。上には姉と兄が、下には弟と妹がおり、両親、兄弟とも仲の良い、とても明るい家庭でした。

日野は養蚕が盛んな農村地帯でしたが「昭和の農業恐慌」のあおりを受け、「繭」の価格が暴落した時代がありました。町の財政は逼迫を極め、日野町は工場の誘致に力を入れていきました。

努力が身を結び、昭和 11 年の「吉田時計店日野工場 (現、オリエント時計)」を皮切りに昭和 12 年の「六櫻社 (現、コニカミノルタ)」、昭和 14 年の「東京自動車 (現、日野自動車)」、神戸製鋼、富士電機の、いわゆる「日野五社」と呼ばれる大工場の誘致が次々と実現して行きました。

その一方、日野においても、戦争による出来事が勃発していたのです。

当時、日野台にある「第三小学校」や「日野自動車」には高射砲の陣地がありました。高射砲とは石垣などを築き、敵の飛行機を打ち落とす大砲を設置している所です。アメリカの B29 は高度 1 万メートルの高高度から爆撃を行います。「第三小学校」にあった高射砲は性能が良く 1 万メートルの射程があったため、これまでも B29 を何機も打ち落としていました。

あるとき尾翼を吹き飛ばされた B29 はフラフラと飛行しながら多摩川の堤防付近に墜落したのですが、パラシュートで一人の米兵が落ちて来るや付近は大騒ぎとなりました。家から刀を持ち出す者や、自転車で現地に向かって走る人

もいました。米兵は日本の憲兵に捕まり、どこかに連れ去られて行きました。

こうした光景を見たり聞いたりする中で、私は国のために何か役に立ちたいとの思いが募り「海軍飛行予科練習生（通称、「予科練」）」に志願することにしたのです。

予科練習生とは「操縦訓練は少年期より開始すべし」という考え方から設けられた、大日本帝国海軍における「航空兵養成制度」の一つでした。太平洋戦争の勃発と共に、下士官として航空機搭乗員の中核を占めていた予科練習生の戦死率はとても高く、期によっては約 90%の練習生が戦死しています。

私も死を覚悟しての志願でした。

そして飛行士の第一歩が始まりました。訓練の場所は多摩川の見通しの良い河原でした。指導する教官は八王子市追分出身の「浜中」という教官です。搭乗するのはグライダーで、機体は木製なのですが翼は布張りでした。

Y字型をした太いゴムを練習生 8 名が教官の合図で引っ張ります。そして次の合図でグライダーはゴムの反動で滑り出し、飛行するのです。高度は 3 メートルに達し、飛行距離は 80 メートルでした。しかし何ととっても操縦するのはまだ 14 歳の子供たちです。失速、傾きなど上手く飛ぶことが出来ません。

そうしているうち、昭和 19 年の夏以降から「飛練教育」はパタリと停滞し始めたのです。どうやらすでに日本は、パイロットを育てる余力など無くなっていたのです。練習生は飛行訓練よりも基地や防空壕の穴掘りなどに従事させられたため、練習生は自らの”土方姿”から「予科練」ではなく「どかれん」と自嘲気味に呼んでいたのです。

昭和 20 年 3 月 10 日。東京大空襲。一夜にして死者、10 万 5 千 400 人。そして同年 8 月 2 日未明、隣の街八王子は市内全域が焼夷弾攻撃に見舞われました。

八王子から逃げてきた父の友人は、その時の様子をこう語っていました。

・・・空は敵機に襲われ、真っ黒だった。敵機は際限なく焼夷弾の束を落としました。束は途中で散らばり、私達の上に降りかかった。夜空がまるで昼のように明るく照らし出されたから、私たちの動きは空から丸見えだったのだろう。やつのことで桑畑に飛び込み、身を潜めて敵機をやり過ごした。しかしすぐそばの農家の軒下から炎が現われ、屋根を這い、紅蓮の炎となって燃え上がった。点

在する農家のあちこちからも火の手が上がった。やがて八王子は街全体が火の海になった・・・と。

その翌日。昭和 20 年 8 月 3 日の私の日記には、日野の様子がこう記されています。

- コニカの工場が戦闘機による 50 キロ級小型爆弾の攻撃を受ける。木造倉庫に命中するも不発。貫通しただけで被害なし
- 日野自動車も焼夷弾攻撃を受ける。だが工場から外れ、被害なし。焼夷弾は甲州街道に数多く落下し、2 人が死亡
- 八高線の谷地川鉄橋に B29 爆撃機が爆弾 10 発を投下。しかし外れて田畑に落下。跡地を見に行く。鉄橋、無事。一発の爆弾で直径 10 メートルの穴があいていて、そのすさまじさに驚く

その 12 日後の 8 月 15 日、日本は戦争に負け、どうやら戦争は終わったようでした。

「玉音放送」は実家で家族一同で聞きました。ラジオの雑音がひどく、内容はよく聞き取れませんでした。両親のひどく落胆した姿を今でも覚えています。

兄弟の誰かが「アメリカ兵がやって来て、みんな殺されるのだろうか」といいました。不安と絶望、やるせなさが我が家を包んでいました。

終戦から 78 年。日野市核兵器廃絶・平和都市宣言から 40 年。

いま「平和」について考えます。

平和とは「戦争の無い世界」だけではない。社会に生きる一人一人が「生きづらさ」を一つ一つ解決していくことも、大事な平和活動ではないかと。

そして私のような戦争経験者は日本が体験した悲惨な戦争について語り、核兵器の廃絶に向けて声を上げ続けることが使命であると。

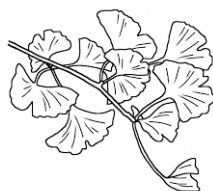
これからも声を上げ続け、次の世代の方々に伝えて参る所存です。



発行 多摩文學の会

発売 未来書房 ISBN 978-4-902086-90-1

価格・税込 200 円



発行所 〒191-0062 日野市多摩平の森 3-3-801

hon-mirai@jcom.zaq.ne.jp